

〔書評〕

前田富祺著

## 『国語語彙史研究』

柳田征司

豊饒の書、というのが、本書を読み進めて行つて、私が強く抱いた印象である。本書を読んでいた一か月間、私の脳裏には宮沢賢治の人と仕事か幾度か浮かんで来ることがあった。ここに豊饒というのは、九〇〇頁をこえる本書のポリリウムのことだけを言うのではなく、「国語語彙史研究」という学問の確立をめざして、根源的な問題に、振幅大きく、また、包容力大きく取り組んでいく著者の精神のそれを主としてさしている。

本書は大きく次の三部からなる。この壮大な構成を見ても、本書の豊饒さがうかがえるであろう。

## 第一部 国語語彙論史

## 第二部 国語語彙史研究

## 第三部 国語語彙史論

著者のことばでひらたく言えば、「研究史の研究、実際の研究、研究の方法の研究」(八四七頁)の三部からなる。著者自らがあとがきに述べるように、著者がとり得たもう一つの方向としては右の三部それぞれを独立した書に完成させるという方向もあった。特に第二部だけを一書にまとめる方向もあったと考えられる。その方向を選べ

ば、恐らく、より均整のとれた書が出来上つたに違いない。しかし、著者は敢えて三部構成の方を選んだのである。その理由を、著者は、「それぞれの分野が独立したものではなくお互いに支えあうべきものであると考えていること、限定した範囲で深めることよりは大枠を定め全体の見通しをつけたいという気持が強まっていること」(あとがき)によると述べる。著者が第一部で展望しているように、毎年発表される語詞・語彙にかかわる論文の数は、音韻や文法に関するそれよりも多い。しかし、それらの多くは、前田氏が志向する語彙史研究とは遠い視点からなされたものである。氏は、それらの論文を否定し去ることなく、あたたかく包容しながらも、語彙史研究がそれらの集積の上になんことを思い、語彙史研究の目的・方法・存在理由を問い、理論的な方向づけと裏づけとに努めているのである。第三部が欠かせない所以である。しかし、著者が最も重視し、また、本書を価値高いものにしてしているのは第二部の「実際の研究」である。評者は、かつて本誌(第97集)で語彙研究の展望を行った際、「思うに、語詞・語彙の研究ほど、これほど、研究の目的や方法などについて、希望や計画を種々に述べるのがやすく、しかも、実際に取り組んで身動きがとれないものはないのではないか。今後の研

究は、具体的にしかありえないのであって」と述べたことがある。これは、理論を軽視した発言などではなく、自らも語彙史の研究に従い、方法を摸索して、手ごたえを得ない煩悶の表出であった。本書の第二部は、いわば自ら手をよごして、語彙史研究の方法を探求した成果であつて、これに失敗したままの評者にとつただけでなく、この研究に従い、また志すすべての人にとつて、大きな指針となるものである。

もし、三部構成に問題があるとするならば、それは、第一部が、展望や書評を含み込んで、張り過ぎているために、問題の核心になかなか迫つて行かないという印象を、性急な読者に与えることがありはしないかということであろう。第一部は、意識史という重要な視点の提示がなされており、また、先行及び同時代の研究の位置づけが行われていて、貴重であるが、一書にまとめられてみると、先のような印象が生じる。

しかしながら、やせた精神に支えられた均整よりも、振幅の大きな豊饒な精神が生み出すものの方を、評者は尊重する。

第二部は、I 語史研究から語彙史研究へ、II 語史研究・語彙史研究の試み、III 身体語彙史の研究からなる。III も II に含まれるものであるが、一つのまとまりをなすために別に立てられたのであろう。ここでは、「試み」がどのように行われているかを見るために、それらを、どのような視点から、どのような方法でなされているかという点から、類別整理してみることにする。なお、巻末の「本書と既発表論文との関係」には発表年月が省略されているので、これを(一)に入れて示した。

1、一資料群に見える語詞を調査し、語彙研究資料としての資料的性格を問題にした章

I 第五章 語彙研究資料としての節用集(一九六九・九)

2、語史研究を行った章

(1) 語形変化を問題にした章

II 第二章 ハグクムとハゴクム(一九六四・六)

II 第三章 ヒネモスの語形変化(一九六三・六)

II 第四章 蝙蝠の語史(一九六八・二)ただし、ここでは慣用句に触れ、蝙蝠がどのような動物と見られていたかなど事典的事実にも触れる。

II モグラの語史(一九六九・二、一九七〇・三)

(2) 語形変化と語義変化とを問題にした章

II 第六章 董の語史(一九八三・六)

II 第八章 “いろいろ”と“いろいろづ”(一九六五・六)

(3) 語義変化を問題にした章

II 第七章 “かたづく”の語史(一九八二・一一)

3、意義分野語彙の研究

(1) 語誌研究を行った章

II 第九章 “めくばせ”の語誌(一九八二・五)

III 第四章 指の呼び方について(一九六七・七)

III 第五章 手の甲の呼び方について(一九七六・五)

III 第六章 掌の呼び方について(一九七九・一〇、一九七八・三)

III 第七章 手首から肩までの呼び方について(一九七九・一〇、一九七八・三)

III 第八章 足の甲と足の裏の呼び方について(一九八〇・一〇)

## (2) 意義分野語彙体系の研究

II 第十章軍記物語における武装描写の語彙——衣生活語彙史序説

として——(一九七八・五)

II 第十一章中世における象徴詞「くるく」系「くるり」系

の語彙をめぐって——象徴語彙史研究の試み——(一九八一・四)

III 第十章語彙体系の記述の試み——手から肩までの呼び方を例として

——(一九七九・一〇、一九七八・三)

## 4、言語地理学的研究との関係を問題にした章

III 第九章言語地理学的な研究との関わり——踵の呼び方を例として

——(一九七九・一一)

このように類別して見て、改めて確認されるのは、一人の研究者によつてよくも可能であつたものと感嘆させられるほど、さまざまな方法による研究と、さまざまな語詞・語彙についての研究が行われているということであろう。対象と問題とに依じて、語史研究・語誌研究・語彙研究が縦横に展開されており、我々は、本書によつて、身体語彙を中心に、日本語の語詞・語彙について相当細部まで知ることができるようになった。

さまざまな方法が試みられているということ注目しなくてはならないのは、氏が、常に、語彙史研究の中心課題に向かつて求心的に前進していることである。資料の方を正面に立て、その語彙研究資料としての資料の性格を論ずる研究の方が、他の語彙研究に比べて、一定の成果を得やすい。しかし、氏は、その方向には進まず、そのような成果(節用集に関するもの)は、先の類別に見るように、第二部の中でもIに別置しているのである。また、第三部第七章語彙史の時代区分において、「語形変化」「語彙体系」とともに「語種」

に注目して時代区分を試みる氏の立場からすれば、漢語・外来語についての研究は重要な主題のはずである。そして、氏には、「漢語副詞の変遷」(『国語語彙史の研究』4 一九八三・五)「漢語副詞の種々相(渡辺実編『副用語の研究』明治書院 一九八三・二〇)」「語種構造の漸移相」(日本語学 一九八四・九)などこの主題を扱う成果があるのである。それにもかかわらず、氏が、この主題に関する成果を本書に収めないのは、その研究が、山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(宝文館 一九四〇・四)以来、着実な成果を得ていることによるものと見られる。氏は、敢えて未開拓の研究の方に進んでいく。更に、氏の研究の足どりを先の類別に見ても、六〇年代における一語の語形変化についての研究から、七〇・八〇年代の意義分野語彙史の研究へと、より中心的な課題——それは同時により困難な課題である——に向けて進んでいるのである。

第二部の研究で、もう一つ特筆すべきことは、著者が、多くの場合、古代から現代までを一気に描いてみせることである。一つの時代の、一群の資料に限定しても、その量は気が遠くなるほど膨大で、しかも、それは性格を異にする種々のものからなる。氏が述べるように、「一資料、あるいは一分野の資料の国語史的位づけのために、一生をかけて研究している人もいる」(はしがき)といったことも珍しくないのであるから、各時代、各資料の専門家からは、資料の選択、テキストの決定などについて異議が唱えられることもあるであろう。また、評者は、先に引いた展望で、意義分野語彙の研究における資料の取り扱い方について、「分野語彙の研究において複数の資料を重ね合わせるこゝがいがいかに困難であり危険であるかは明白である。そこで、一つの行き方としては、やはり体系の考察に最もよく

耐えうるただ一個の資料について徹底的に考察をすること、或はすることからはじめることが考えられると思う。」と述べたことがある。しかし、著者は、それらのことを十分承知した上(著者には、近くは、「語彙資料の扱い方」(『国語論究1語彙の研究』明治書院 一九八六・五)の論もある)で、敢えて「上代から現代までにわたり、なるべく広い範囲の国語語彙史の見通しをつけることを第一に考えたのである」(あとがき)。そのために、氏は、膨大な文献にやささも圧倒されることなく、精力的に用例を集めてくる。その用例の博搜ぶりは、氏の論文が発表されたそれぞれの時点において人々を驚かせたが、こうして、各論文が集められてみると、用例探索のために使われた氏のエネルギーの大きさに改めて敬意を表さずにはいられない。そして、このように古代から現代までの流れとして大きく把握がなされると、たとえ個々の資料に片寄りや特殊性があつたとしても、その成果は説得力をもつて我々に迫ってくる。

先に、氏の研究が、語詞・語彙研究の中で、中心となるべき重要な意義分野語彙史の研究に集中してきていることを指摘した。その研究にしぼって見る時、それは、どのように進められており、どのように評価されるであろうか。

この研究主題に関して、我々は、早く佐竹昭広「古代日本語に於ける色名の性格」(『国語国文』一九五五・六)という卓抜した成果をもつが、それ以後は、さまざまな試みにもかかわらず、いまだめざましい成果を得ていない。というよりも、むしろ、一部の試みが、厳しい批判(谷沢永一氏による)を受けるといふようなことさえあつた。そのような現況にあつて、『日本の言語学 第2巻意味・語彙』(大修

館書店 一九七九・二)が、「語彙の構造・用法」に関する代表的な論文として、佐竹氏の前掲論文とともに、前田氏の「指の呼び方について」を収めたこと一事をもつてみても、氏の研究がいかに高く評価されているかが知られよう。評者も、この研究を、明解で、すつきりしたものとして高く評価する。

ところが、著者は、この論を意義分野語彙体系の研究としては位置づけず、語誌研究と呼ぶ(七〇三頁)のである。著者の言う語誌研究とは何か。氏は次のように述べる。

○語彙史の前提としては、個別の語を語史として取り上げるにとどまらず、語誌として他の語との関連で考えることが必要になつてくる。(一一六頁)

○このような語史というのは、時には他の語とも関わりを持ちいろいろな様相を見せて語誌となり、また語彙史にも連なつてくるのである。(二八七頁)

著者の言う「語誌」研究とは、同義・類義語や対義語など関連する他の語との関係を明らかにする研究のことである。このような「語誌」という語の用い方は一般のそれと異なるが、それはともかく、著者は、語史研究と語彙史研究との中間に語誌研究を設ける。語彙を意義によって分類して行くと、大小さまざまな意義分野語彙が認められることになるが、その一番小さい分野語彙の中に同義・類義語が位置してはならずである。そして、分野によつては、類義語の連鎖で体系をなしている分野もあるかも知れない。そういう意味では、著者の言う語誌研究も意義分野語彙体系の研究と認めてよいようにも思われる。それにもかかわらず、語彙史研究の中心課題に立ち向かう著者は、著者の言う「語誌研究」と語彙体系の研究とを区

別し、語誌研究「指の呼び方について」とともに、別に第十章「語彙体系の記述の試み」を留意する。ここにも、著者の、語彙体系を求める姿勢の一途さを我々は見る。『日本の言語学』の解説で、林大氏が、

「指」の論文はいくら幅広い範囲をもみており、隣接する事項間の対応又は其転性が論じられる点で、体系の論の中に取り扱うことができる。(五五八頁)

と述べられた時、氏は、更に一層体系的の解明を深めることを希望されていたのではないか。筆者も同じ望蜀の希望を抱いていたのであるが、第十章はそれに応えてくれているのである。

さて、その意義分野語彙体系の研究方法を見ると、服部四郎・国広哲弥両博士などによって進められてきた方法、即ち、意義素を認め、これを意義特徴によってとらえようとする方法によりながら、著者独自の展開が試みられている。今後更なる進展がはかられるものと思われるが、それについて、評者の希望を二つだけ記しておきたい。一つは、本研究の最大の特徴であると思われる豊饒さを弱めないようにしてほしいということである。著者は「第三部に所収の旧稿の中では、数詞語彙史に関わるものが現在の私の考え方にもっとも近いものであった」(あとがき)と述べるが、数詞に関する研究(第三部第六章は、第二部各章の研究に比べると、豊饒さにおいて弱くなっているのではないかと評者には思われる。著者が、「これに手を入れた第三部第六章を読み直す時に、なお述べ足りないところの多々あることを感ずる。)(同前)と言う時、その意味、豊饒さにおいて弱くなっているのではないかという意味も含まれていることを望む。もう一つの希望は、右に述べたことと相入れにくいものである

るかも知れないが、体系記述の方法をもう少し単純で、わかりやすいものにしてほしいということである。語彙体系が複雑であるために、語数の多い分野を、意義特徴によって把握しようとすると、既に行われてきた、十一をつかったマトリックスや樹状図などで表わし得ないということなのであるが、ギリシャ文字、十一、←→などを混用した記述は複雑に過ぎるのではないかと思われる。

第三部が立てられている価値については既に記した。ここでは、語彙史論の根源的な問題が真正面から論じられている。しかも、それらは、氏の研究の進展とともに、初出の論を書きかえたものである。ただ、何分あまりにも根源的な問題が、限られた紙幅で論じられているために、評者には十分理解しにくいところもあった。その最も重要な点の一つをあげると、著者が意義分野語彙史(部分体系)と語彙史との関係をどのように考えているのか(例えば、七七九頁など)明らかでないことである。今、意義だけでなく、形態・機能・語種・位相などの視点が同じように重要であるという問題はおく。意義による語彙体系についての研究に限って言うと、語彙史の解明に意義分野語彙史研究の集積が不可欠であることは疑いないが、語史研究の積み重ねによって語彙史がとらえられないように、意義分野語彙史研究の単なる集積によっても、それは把握しきれないのではないかと、評者は考える。従って、評者は、著者が、語彙史の時代区分(第七章)を、方言の等語線に比して、諸事象の重ね合わせの上に認めようとするのもよく理解しにくい。重要な事象を選ぶにしても、諸事象の羅列によつては歴史を把握することはできず、諸事象を組織的にとらえ、何が、どのように語彙史を動かしてきたのかを

説明するところにしか、それがあり得ないと考えるからである。そうは言うものの、語彙史を動かしてきた原理などというものを説明することができるとかどうか評者にはわからない。しかし、意義分野語彙史の研究を進めるとともに、総体として語彙史を説明する原理を探究する必要があるのではないかと愚考する。意義分野語彙史の研究も、そういう視点から、いかなる分野語彙から研究を進めるか、どのような解析を行うかということを決定し、進められるべきなのではないか。例えば、意義特徴論に立つとして、古代において重要であり、近代に入つて重要でなくなった意義特徴があり、それが日本語の語彙を大きく動かしたのではないかといった仮説を得たとすると、そういう視点から語彙史を説明することを試みる事ができるのではないか。それが今の問題に該当するかどうか明らかでないが、例えば、意志的か無意志的かという意義特徴は、動詞「をり」と「あり」、接尾辞「す」「かず」、助動詞「つ」「ぬ」が接続する動詞の二群、などから見て、古代において重要なものであったが、近代になると、異なる意義特徴によつてとつてかわられたり、意味をもたなくなつたりしている。

著者の論理と表現とは、全巻を通じて、わかりやすく、評者は、その姿勢に強く共鳴を覚える。ただ、第三部第四章語彙史とはの論などは、心あまりてことばたらずの感がしなくもない。また、旧稿を改編する際、論旨に不鮮明な部分を生じた章もあるように見られる。「人間の文化の歴史として」(八四五頁)の語彙史、「国語文化史」(八五一頁)という考え方とともに、更にくわしく論じてくださることをお願いしたい。

評者の非力のこととはもかく、巨視的な視点からのみ書評を行つ

たために、片寄つたものとなつてしまつたことについて、著者ならびに読者の寛恕をこいたい。今、評者は、「国語語彙史研究」というこの若い学問が、その草創期にあつて、エネルギーに満ちた豊饒の書をもち得たことの意味の大きさを思う。仄聞するところによれば、『幼児の語彙発達の研究』(前田紀代子氏と共著 武蔵野書院 一九八三・一二)に続く本大著の完成の後、著者は健康を害されているという。著者の大著にもかかわらず、というよりも、本書が、現在到達し得るぎりぎりのところを示したが故に、「国語語彙史研究」の将来には、はかり知れない、新しい困難が立ちはだかつているように思われる。著者が、一日も早く本復され、この分野の研究を力強く先導して下さいを願つて、筆を擱く。

(昭和六十年十月五日発行 明治書院刊 A5判 九二七頁 一八〇〇円)

——愛媛大学教授——

(昭和六十一年八月二十九日 受理)